

平家物語

一・四 禿童 かむろ

かくて清盛、にんあん仁安三年十一月十一日歳五

十一にて病に冒され、たちま忽ちに出家入道す。

法名を「浄海」じやうかいとこそ名のられけれ。その

故しるしにや、宿病立ち所に癒えて、天命を全また

うす。人のしたがひつくこと、吹く風の草木

をなびかすがごとし。世のあまねくあふげ

ること、降る雨の国土を潤すに同じ。「六

波羅殿の御一家の君達きんだち」とだに云ひてしか

ば、華族も英雄も肩を並べ、おもて面を向かふる

者もなし。にゅうどうしやうこく入道相国の小舅平大納言時忠ときただ

きやうの卿の宣ひけるは、「この一門にあらざら

ん者は皆人非人たるべし」とぞ宣ひける。にんぴにんさ

れば、「いかにしてもこの一門に結ばれん」

とぞしける。えもん衣文の指貫のかきやうよりはさしぬき

じめて、えぼし烏帽子の矯めやうにいたるまで、た

「六波羅様」とだに云ひてしかば、一天四海
の人皆これを学ぶ。

いかなる賢王聖主の御まつりごと、けんおうせいしゆ摂政

関白の御成敗をも、世に余されたる徒者いたずらもの

などの、かたはらにてそしりかたぶけ申す

ことは、常の習ひなれども、この禅門の世ざ

かりのほどは、いささかいるがせに申す者

はかりごと

なし。このゆゑは、入道相国の 謀 に、十

わらんべ

四五六の 童 を三百人そろえて、髪を禿に

かぶろ

ひたたれ

切り廻し、赤き直垂を着せて、召し使はれけ

わうばん

るが、京中に満ち満ちて往反しけり。自づか

おの

ら平家の御事を悪しきさまに申す者あれば、

いちにん

一人聞き出ださるるほどこそあれ、三百人

しぎらぎら

に触れまほして、その家に乱れ入り、資材雑

ぐ ついぶぐ

る

具を追捕して、その奴を搦めて六波羅に率

て参る。されば目に見、心に知るといへども、

言葉にあらわして申す者なし。「六波羅殿の
禿」とだに云ひてければ、道を過ぐる馬、車
も、皆よけてぞ通しける。「禁門を出入りす
といへども、姓名を尋ねらるるに及ばず。

けいし 京師の長吏ちようりこれが為そばに目を側む」と見えた
り。